

然別演習場に今年度第一号の「熊情報」である。演習場内で、熊若しくはその痕跡を見つけた部隊・隊員は漏れなく報告するようにしており、その内容は関係部隊や演習場使用部隊に通報される。過去 4 年間の熊情報の発出状況を見るに、年度ほぼ数件であるが、平成 13 年度は異常に多くて例年の 3 倍以上である。情報数の多さは部隊の使用頻度に比例するのは事実であるが、昨年度の使用実績が例年に比して異常に多いということも無い。矢張り、天候気象に影響されていると看做すべきだ。昨年度は平年に比して気温が低めであり、山は不作だったのだろう。

全道の目撃情報数も 900 件余りと例年の 2 倍以上に及んでおり、過去 10 年間での最高記録だとのことである。考えられる理由として、人間の関心の増大、携帯電話の普及等が挙げられている。

尚、同じく当師団管内の矢臼別演習場における熊情報の発出件数は、例年 10 件余り、昨年及び一昨年度は 20 件弱であった。両演習場に於ける月別の情報件数には、これと言った特徴はない。強いて言えば、然別では夏場に多く、矢臼別では秋に多いといえよう。

罴の英名は、Brown Bear であり、「茶色の熊」という意味である。北海道に棲息しているのは蝦夷罴と呼ばれ、罴の亜種である。（蝦夷ヒグマの他には、ヨーロッパヒグマ、コディアクヒグマ、アメリカ中北部のグリズリー {ハイイログマ or アメリカヒグマ} という種がある。）体重は、オス 200 乃至 300 kg、時には 400 キロを越すものもいる。寿命は 20 年乃至 30 年である。

北海道における罴の棲息頭数は、2000 から 3000 と言われている。罴は群生せず、普段は単独で行動する。親離れ出来ない小熊を連れた親子熊の場合や、発情期にはオス熊 2, 3 頭が雌熊をいうなればストーカーすることもある。

罴の行動範囲は広い。活発な熊で約 150 平方 km、時には一日 50 キロほど移動出来る。これで、思い出すのは、私が、旭川勤務時代のことである。熊の目撃情報があり、地元の人達が翌未明から概地域を包囲し、追い詰める作戦を実施したが、終に発見には至らなかった。熊の行動能力と危険予知能力に舌を巻いたものである。

我々が熊情報を出す所以は、罴と遭遇した場合に被害を想定しているからである。統計によるとこの 30 年間に猟師以外の一般の人が罴に襲われた事件は 30 件で、年平均では 1 件になるそうである。明治以来の罴の事件として最大のものは、1915 年（大正 4 年）12 月 9 日からの 3 日間で開拓農家 12 軒を襲い、6 人を殺害、3 人に重症を負わせた「苫前三毛別事件」である。所は苫前郡苫前村の三毛別の六線沢という開拓部落であり、現在は、苫前町三溪となっている。大雪山の登山史の中で唯一の罴による死亡事件は、1945 年 7 月であり、日高山脈では 1970 年福岡大学のワンダーフォーゲル部のパーティーがヒグマに襲われ、3 人が命を落としている。溪流釣りの人は細心の準備・警戒が必要だ。熊は街中にも出没することがある。

熊に遭遇した場合の対応については諸説紛々としており、これぞというものは無いようだ。もし、熊に出会ったら、罴と「睨めっこ」する方法が有効と言われる。身動きせず、熊の目を見つめ、決して目を逸らさないこと。目を逸らすものなら、熊は己の優位を確信して襲い掛かってくることもある。最後まで、目を逸らさず、罴が引き返すのを待つしかない。逃げると追いかけてくるのは罴に限らない、動物の本能である。熊の速度は時速換算で 60 キロである。とても敵う

まい。石を投げるなどの挑発行為は、言語道断、罨をいきりたたせるのみだ。死んだ振りが良いという俗説もあるが、どうだろうか。助かった例もあるそうだが、何れにしろ、罨が死人を襲わないと言うのは誤りらしい。木に登るのも考えもの。小生が学生時代に遠軽部隊の隊員に見せて貰った木登りしている罨の写真は未だに鮮明に脳裡に焼きついている。

子連れや手負いの罨が一番危険だ。また、一度人肉の味を知った罨も危険だと言われる。従って、そのような罨は確実に射殺すべきである。最も危険なのは出会い頭の遭遇であり、罨は危険を排除しようとして、彼の爪で人間をはり倒すらしい。瞬時に命を落とすことになる。そうならない為に、どうするか。罨はどちらかと言うと臆病であるので、罨に人間の存在を知らしめることが必要だ。集団で談笑しつつ行動したり、鈴を鳴らしたり、ラジオを掛けながら行動するなどの処置が必要だ。然し、最も重要なことは、君子危うきに近寄らずである。罨情報を事前に入手しよう。また、罨に人間の食物の味を覚えさせないことも重要だ。心無い登山客が捨てた残飯から、味を占め、人間に食物を求めて来るようになる？埋めても嗅覚の発達した罨には何の役にも立たない。

罨に襲われたら抱きつけと言った自称罨研究家の函館の隊員が居た。罨は前足を手の如くには使えないので、安全だと言ったと思うが、果たして・・・。

罨は冬眠する。11月下旬までには、冬籠もりに入り、穴から出るのは、3月下旬から4月上旬・中旬である。4ヶ月もの間餌を食べずに穴に籠もるのだから、体重が2～30%も減少する。この為、秋の罨の食欲さには驚かされる。罨の冬眠は、熊型冬眠とも言われる非常に浅い眠りであり、僅かな音や臭いにも反応すると言われる。ヒグマの雌は、極めてユニークな生殖機能を有する。交尾は5月～7月頃に行われるが、受精卵は、10～11月まで子宮に着床しない遅延着床と言う現象がある。

平成4年以降5年間、罨の捕獲が自主規制されていたが、平成9年からは自主規制は終了している。全道で年間300頭余りが捕獲されている。帯広駐屯地の道東資料館に、嘗ては、罨の剥製が展示されていたが、数年前に美幌駐屯地に移管され、現在もある部隊の正面に陳列されている。このヒグマは、昭和46年5月清水地区で遭難したヘリコプター（北部方面航空隊所属）を捜索支援中の第5特科連隊第6大隊の隊員が、射殺したものである。寡聞にして自信はないが、陸上自衛官で、小銃でヒグマを射殺したのは彼のみであろう。概地区が罨の巣であることから小銃を携行したもののようだ。

美幌駐屯地の説明文以下の通り

『罨（ひぐま） 銀毛

この罨は、昭和46年5月18日午後2時頃芽室町の剣山東南山腹（頂上から400m）において、遭難ヘリコプター搭乗員を捜索中のところ突然出現し、捜索隊員に襲いかかろうとしたため、身の危険を感じた隊員が小銃で射殺した。性別：雄 年齢：4歳 体重：120kg』（写真は下に掲載）

（参考：各種辞典、師団史、各種HP、関係者の聞き取り等）



美幌駐屯地の剥製

[追記] 高射特科大隊長から貴重な情報提供があった。第5師団第5高射特科大隊本部管理中隊に、罟射殺を10㍍程度の近さから目撃した隊員が居ることが判明した。当時一等陸士だったその隊員も来年には定年を迎えるそうだ。彼の話によると『件の熊は、立っても精々1㍍そこそこの小さな罟だった。兎も角、恐ろしかったのだろう、小銃を射撃した隊員は、当初慌てて連発で射撃した為、弾丸は殆ど熊の足に命中して、致命傷を与えることは出来なかった。射撃をした隊員は〇〇3曹と△△士長の兩名であり、△△士長の発射した弾で熊は絶命したという。』熊牧場の熊でも怖いことから、野生の熊は例え体長1㍍位であっても怖いだろう。